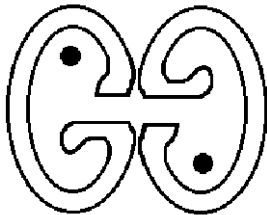


日本双生児研究学会ニュースレター

《第41号》



Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2007年8月発行

目次

日本双生児研究学会第22回学術講演会のご案内	2
日本双生児研究学会20周年記念シンポジウムの記録	4
第12回国際双生児研究学会に参加して	24
論文紹介	26
平成18・19年度日本双生児研究学会幹事会議事録	27
日本双生児研究学会平成18年度会計収支報告、平成19年度会計予算案	30
日本双生児研究学会第25回研究会のお知らせ	31
ご報告とお礼・編集後記	32

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00190-7-185311)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部安藤研究室内
日本双生児研究学会事務局

E-mail : juko@msa.biglobe.ne.jp
電話 : 03-3453-4511 [内線 23109]
FAX : 03-5427-1578

日本双生児研究学会

第22回学術講演会のご案内

日時：2008年1月27日（日曜日） 午前9時30分～午後5時

会場：大阪大学コンベンション・センター（1階会議室、託児付）

〒565-0981 大阪府吹田市山田丘1-1

アクセス地図：<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/accessmap.html>

施設案内：<http://www.handai-kouenkai.org/convention/>

1. 一般演題：9:30~11:00

2. 特別講演：11:00~12:00

司会： 戸田達史（大阪大学医学系研究科教授、臨床遺伝学）

安藤寿康（慶應義塾大学文学部教授、行動遺伝学・教育心理学）

題名：「Twin Research in the Post-Genomic Era」

演者： Danielle M. Dick 博士（ワシントン大学、精神医学）

3. 総会： 13:00~13:50

4. 特別講演：14:00~15:00

司会： 末原則幸（大阪府立母子保健総合医療センター、副所長）

森本兼曩（大阪大学医学系研究科教授、環境医学）

題名：「経済学における双生児研究の進展」

演者： 大竹文雄 教授（大阪大学社会経済研究所、所長）

5. 一般演題：15:00~17:00

（懇親会 17:30~18:30）

演題（研究発表・報告）募集

大阪で開催される第22回日本双生児研究学会では、会員の方々からの活発な演題発表が多数寄せられますよう皆様のご参加を宜しくお願い申し上げます。どうぞ奮ってご発表の演題をお寄せください。

* 発表いただける方は、演題名、発表者名、全員の所属および発表要旨をA4の用紙1枚（600～1000字程度）にまとめて郵便、またはメールに添付して下記にお送り下さい。

* 参加費：2,000円（多胎児育児支援グループ関係者の方は、1,000円）

[締め切り] 2007年11月5日（月）必着

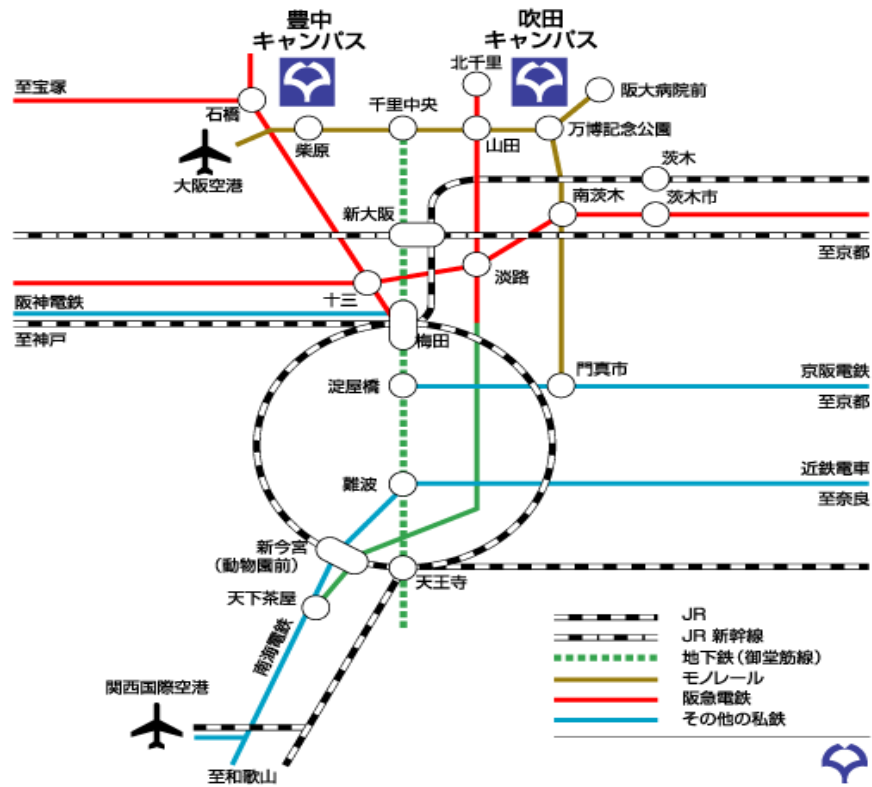
[送り先、お問い合わせ先]

〒565-0971 大阪府吹田市山田丘1-7

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 早川和生 宛て

TEL & FAX: 06-6879-2550

E-mail: hayakawa@sahs.med.osaka-u.ac.jp



吹田キャンパス

電車 阪急電車千里線「北千里駅」(終点)下車 東へ徒歩
 学生部、人間科学部、医学部(医学科)約30分
 医学部(保健学科)、歯学部、薬学部約25分
 工学部 約15分

モノレール 大阪モノレール
 「阪大病院前」下車 徒歩約5～15分

バス 阪急バス 千里中央発「阪大本部前行」または「茨木美穂ヶ丘行」
 近鉄バス 阪急茨木市駅発「阪大本部前行」(JR茨木駅経由)
 いずれも、阪大医学部前または阪大本部前下車 徒歩約5～15分



日本双生児研究学会 20 周年記念シンポジウムの記録

「ふたごが語るふたご」

— 大人になってもふたごはふたご・今までの歩みを振り返って —

日時：2006 年 12 月 9 日午後 1 時半から 3 時半まで

場所：慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 519 教室

パネリスト：三橋俊夫（東京大学教育学部附属中等教育学校）、杉本昌子（西宮保健所）、
志村真（中部学院大学短期大学部）、志村恵（司会：金沢大学）

安藤寿康：今日はあいにくの雨になりましたが、この日本双生児研究学会が設立されてから早いもので 20 年がたちました。私はこの研究学会の幹事と事務局長を務めております慶應義塾大学の安藤と申します。記念すべき 20 周年のシンポジウムを私共の大学で行えることを非常に喜んでおります。短い時間ではありますが、ふたごの研究学会の一番の主役であるふたごさんご自身の言葉というのは改めて私たち研究者の研究や子育てを見直すヒントになるかと思えます。では司会の志村恵先生にバトンタッチさせていただきます。

志村恵：ご紹介いただきました金沢大学・いしかわ多胎ネットの志村と申します。今日はよろしくお願ひ申し上げます。最初にひとことお詫びを申し上げたいと思ひます。予定ではもうひと方、田所直子さんが参加して 5 人でお話することになっていましたが、体調の関係でいらっしやれないということでした。

それでは、三人のふたごの方々のお話を伺いながら、いろいろな問題について共に考えていきたいと思ひます。私は比較的司会に徹することにします。どのように進めていくかということですが、まずそれぞれ三人にふたごでよかったこと、ふたごでちょっと困ったなとかちょっと嫌だったな、ということをお話しいただきまして、そこから出てきた話題を深めていきます。それから残りの時間、皆さんから質問をいただいて、それに私たちがお答えしながら共有していきたいと思ひます。

私たちは一応ふたごなのですが、「^{いち}ふたご」なので、私たちの発言がすぐふたご全体を代表するとか、一般化できるとは思ひません。けれども、やはり普遍は個に宿ると言ひますか、一人ひとりがあって全体があるということですので、少しはみなさんの参考になるのではないかと思ひます。私たちは 30 代、40 代、50 年代代表という形で参っております。申し訳ないですが年の順で三橋先生からお話しいただいて、次に真（と呼んでおります）、杉本さんという形でいきたいと思ひます。ではお願ひいたします。

三橋：みなさんこんにちは。三橋と申します。昭和 24 年生まれですのもう 60 に近い年齢です。一卵性のふたごでして、現在東京大学教育学部附属中等教育学校に勤務してふたご研究をしています。実はその卒業生でもあります。大学を卒業してすぐに附属学校に呼ばれたのですが、少し遠回りをして三年ほど東京都の教員をして、再度の誘ひがあり、東大附属に勤めました。ふたご

だからふたごの研究グループにも入れということで、ふたごである自分が双子研究に携わってきた、という経緯があります。

私たちふたごは戦後すぐの生まれで、上に兄がいたそうですが、出産の時に母を助けるために赤ちゃんをあきらめたという経緯があって、その兄の生まれ変わりのふたごということで両親は喜んでやうです。非常に弱くて、一人が熱を出しやと治ったかと思うともう一人が熱を出すという状況があって、今ですと冷蔵庫がありますが、氷屋さんに買いに行くのが普通だった時代に、熱さましの氷を保管するために冷蔵庫を買ったのだ、冷蔵庫のあった家は珍しいのだ、と父は言っていました。

下に三つ違いの弟がいて、男の兄弟三人です。子どものころは上二人の関係が強かったために、下の弟はほとんど家に寄り付きませんでした。隣が中華そば屋さんだったのですが、「おそばやさんちの子」と呼ばれていて、寝に帰ってくるような状態があって、弟に聞くと当時兄貴たちの間にはなかなか入れなかったということです。

遊びもほとんど二人で遊んでいましたので、男の子なのにお人形を背負って三輪車に乗っている写真や、ずいぶん父が奮発したのですが、野球のユニフォームを買ってもらって二人で野球をやっている姿の写真がいっぱいあります。でも、どこにも下の弟の姿はない、という感じです。ただ、学校が始まると友達関係は別々でした。一年生二年生の時はいろいろな学校の連絡等もあるということで、母親の希望で同じクラスでした。三年生からは別々のクラスに在籍し、それぞれの友人を作っていましたが、その友人たちが家に遊びに来ることはなかったです。ひよっとすると友達も、家で二人がいっしょになると行く場所がなかったのかな、という感じがします。そのくらい仲がよかったということです。ただ、これが反抗期を迎えたりすると相当激しいケンカもしたので、どちらかが死ぬまでやれと言われたことがありました。今は東大附属のふたごのご両親に一番嫌な質問は何ですかと聞くと「どっちがお兄ちゃん？（お姉ちゃん）」と聞かれること、というようにあまり区別しないで育てているようですが、それほど大きな差をつけるというのではなくても、当時は「上・下」というのがあって、僕が長男、弟が次男ということで「お兄ちゃんは」という言い方をされていました。附属の当時の研究でも、兄的姉的、弟的妹的性格に分かれるのではないかとされていました。つまり、どちらかという兄・姉の方が気が小さかったり、繊細だったり、気難しかったりということがあって、弟・妹の方が社交的だったり、どんどん意見を言ったり、活発だったりというようなところがあるのではないかと、いうふうに言われていました。うちの兄弟もそのとおりでして、例えば洋服を買ってあげると言うと、「これがいい」と言うのはいつも弟で、「チクショウ、先に言われた」と思いました。そういう連続だったかと思えます。附属学校の中でも、やはり違いを大事にしていこうということで、ふたごは違うのだ、というポジションに立って私たちも子どもたちを見ている。そうは言ってもその違いのレンジは、他人同士の違いのレンジより狭いのだろうと思えます。ですから、弟に「これがいい」と言われたときは自分も実はちょっぴりよかったので、じゃあまったく正反対のものを選んだかという、かなりそれに近いものを選んでいたな、と自分では思っています。それから、これが兄的・弟的なのかわかりませんが、一発勝負に強いというか、そういうのは弟の方でして、僕は安定した環境が与えられればなんとか実力を発揮して弟に追いつける。それはどういうことかという、例えば入学試験とか塾の試験では僕は落ちるけれど弟は合格するとか、なんとか合格して塾に一年間通ってみると力的にはそう変わらなかった、というようなどころがあり、それこそが根性がすわっている弟的性格だったのかな、という感じはしています。

野球をずっと二人でやっていたので、中学に入ったら野球部に入るものと母親も思っていたようですが、私はなんと数学・物理部に入部したのです。別に弟が嫌だったわけではなくて、部活

のオリエンテーションでロケットを飛ばすというのに惹かれたため、母親も呆れていましたが、結局一ヶ月くらいでロケットがあまり飛ばなかったのがっかりして野球部に入り直し、6年間二人とも野球をやっていました。成績についてはほとんど変わりがなかったです。6年間同じ学校だったので、土俵が同じ中で比べられるということはありましたが、ほかの友達に負けるのはそんなに悔しくなかったけれど、弟に負けるのは悔しかったという思い出があります。ひとり10分の持ち時間なので、また質問があったらお答えしますが、進路については、弟は小さいときに大病をしたので「僕は医者になる」とはっきりしていて、僕も「医者がいいかな」と思った時期もありましたが、その当時は別のところに進もうと考えていました。

ふたご意識の問題ですけれども、中学高校と同じ学校に行っていてふたごを意識せざるを得なかったけれども、他にふたごがたくさんいた学校でしたので、それほど嫌な思いをしたことはないです。ただ、うちの学校の卒業生たちに聞くと、ふたごがいっぱいいて嫌な思いはしていないし居心地がいいと思っていたけれど、大学に出て二人がふたごを意識しないで別の世界ができたとき、「意外にいいものなんだな、こんなに気が楽なものなのか」というふうにアンケートに答えてくれていますので、果たして常に同じ土俵の上で比較されるということがいいかどうかということは考える必要があるのではないのでしょうか。最近ですと、クラスをかえてくださいと言っても都内の学校ですと一クラスしかなくて同じクラスになるということで、問題がもしかしたら生じるかもしれません。それからふたごの場合（ふたごのお子さんをお持ちの方がたくさんいらっしゃると思いますが）、特に一卵性の場合には、親御さんたちが学力差ができた場合にできるほうに揃うはずだと思われるから、下のほうの子はプレッシャーを感じるのではないか。テストの成績を見ても、5教科の合計で見ればたいして変わらなくても、文系が得意、理系が得意などいろいろあるので、ケースごとにみていかないといけないのかな、と思います。

今は亡くなりましたが、私は長男なので両親と同居していました。弟は地方の大学に行ってそちらの大学病院にいますので、大学を過ぎてからはあまりふたごだという意識はないですね。逆に言うとうちが相手にならないというのもふたごだからなのかな、とも思いますが、半ば音信不通のような状態でも気にならないというのが現在の状況です。とりとめのない話になりましたが、時間ですのでとりあえずここで切りあげさせていただきます。

志村恵：ありがとうございます。ご自分の経験とふたごの学校である東京大学教育学部附属の教師としての経験、両面からお話いただきました。続いて真、お願いします。

志村真：こんにちは、志村真です。ふたごでよかったこと、ふたごで少し困ったことについて話すように言われています。昨日、私は東京で用事を作りまして、昨夜は品川の同じホテルに彼(恵)と泊まりました。妻は「ふたごだからツインルームをとるんでしょ?」と言いましたが、でもシングルを取りました。ふたごでツインルームにこの年で泊まったといえば、かなり面白かったと思うのですが、ホテルに変な誤解を与えてはいけませんし、そういうわけでシングルルームになりました。

ふたごでよかったことと言えば、今みたいにふたごの話題でみんな盛り上がるというのがとてもよかったと思います。いくつかのポイントでお話したいと思います。私は現在岐阜県にある小さなキリスト教主義の短期大学でキリスト教関係の科目を教えていますけれども、キリスト教の牧師でもあります。父親が牧師であったことでキリスト教会の環境の中で育ったのですが、その中で何回か引越しをすることがありました。幼稚園の年中から年長に上がるときに、高知県の小さな町から東京の文京区に引越しをしまして、1年間後樂園球場の近くで生活をしました。1年で香川県の高

松に引っ越しまして、そこに9年、小・中とおりました。高校に入学するときにまた引越しになりまして、ちょうど高校入試を控えていたのですが、クリスマス前だったか後だったか、12月になって急に父が私たちと5歳下の妹を呼びまして、「引越しをすることになった」といきなり。高校入試の準備とかいろいろしていたのですが、受験科目も変わりますし、いろんなことで違う名古屋の高校を受けることになりました。ですから四国の高松から名古屋まで、私立と公立とで2回、泊りがけで父親と3人で試験を受けに行きました。そういうことで、ちょうど5歳から6歳、小学校に上がる時、そして高校に入学するときに引っ越したものですから、それはものすごく大きな人生の変化と言いますか、ライフイベントになったと思います。

5歳のときに東京に越してきたときには、やはり小さな田舎町から東京に来て、年長の幼稚園児ですけども、本当に時間の感覚がちがうものですから、周りの幼稚園のお友達と一緒に行動することができないんですね。どうしてもいろんなことで感覚のずれがあって、そういう中で辛かったこともあったと思います。それからまた知らないところに小学校で入っていくわけですね。お友達は1人もいないところで小学校に入った。で。クラスは違いましたけれど、兄(彼は兄ですけども)と一緒にいるということがどれほど大きな支えというか、励ましになったかわかりません。

それから高校受験のことですけど、まったく知らないところの受験をするということで、お互い励まし合ったということはないけれども、お互いの中で一緒に困難を乗り越える励ましになったのではないかと思います。私は18歳、高校を出るときに東京のほうのキリスト教関係の学校に入ることになって、それ以来ずっと両親のもとを離れましたが、彼は名古屋に残りまして、それ以来別々の生活になっています。

よかったことですが、先ほどのお話しと違うのですが、私は弟というアイデンティティで育っていると思っています。三橋先生の弟的性格とはちょっと違って、一これは困ったことなのですけれど一切符を買うとか買い物をするとか、何か社会性を広げる場面というのを全部彼に代表してもらって、切符を買うときは彼に2枚買ってもらって僕が買ってついて行く、バスを降りるときもボタンを押したりということは全部彼にやらして僕はついて行くというように、非常に社会性の獲得に遅れが出てしまって、自分の認識としては引っ込み思案というのがあります。彼は中学のときに、知り合いの牧師さんがいるということで九州の大分県に高松から1人で旅行に行っているのです。それはもう驚異でして、私にとっては信じられない冒険なのです。なぜ彼は私を誘わないのかというのもよくわからないのですが、彼はそういうふうに非常に発展性を追及する。旅行に行ったり、あるいは大学生になってからは学校を休んでドイツに1人で徒歩旅行に行く。見ると大きいリュックサックを背負って行くんですね。私は東京に住んでいて彼を空港に見送りに行きました。羽田空港だった時代です。ジャンボジェット機が飛んでいく中を、小さなソ連のアエロフロートが飛んでいくんですね。僕は大丈夫かな、と思いながら見送ったのですけれど、「すごいな」と思って、冒険心というものを先に示してくれて、いつか自分もという憧れをもったりしました。そんなことで引っ張られるということで励ましを受けたと思います。

また、これは特殊な例だと思うのですが、私は牧師をしていますので一日本のふたご史上でも珍しいのでないかと思いますが一私が彼の結婚式の司式をいたしました。「志村恵、あなたは〇〇を娶り…誓いますか」とか何んとかやったんですね。これは本当によかった。一緒に人生の出来事を経験できたというのはよかったと思います。

あと自分たちはふたごであるということを楽しぶというか、遊ぶというか、そこで話題ができたりいろいろな人とつながることができて、とても幸せに思います。先日、スリランカの津波被災地を訪問したときに、そこに保育所を作る運動をしているのですけれども、その保育所を作る土地の提供でいろいろ問題があったときに現地のカトリック教会の神父さんを訪ねたのです。そのと

きの神父さんがふたごなんですね。その晩私がお世話になったロッジのオーナーとふたごなのです。お兄さんが神父さんで名前がジョセフ・メアリー（どんどん話しが長くなってしまいますね）、ヨセフとマリア、キリストのお父さんとお母さんの名前をもったふたごに出会った。日本からふたごが来た、ということで大歓迎してくれました。「そうか、ふたごか」ということで「君のところはどうだった？」ということでいろいろ交流をして、ふたごであることがきっかけで話が弾むということがあります。

困ったこと。先ほどの社会性の獲得が遅れたということが一つ大きいかなと思います。それから子どものときは、特に小学生のときは実力が伯仲して、いろいろな運動にしてもゲームにしても実力伯仲なので終わらないんです。つまり、お兄ちゃんと弟ですと、絶対お兄ちゃんが勝ちますから、途中で面白くないからとか、敵わないからとかで止めてしまうわけですね。ところが実力伯仲ですから勝負がつかないわけです。5回戦と決めていても、3対2になったとたん悔しくなって、「もう1回やろう。」夜遅くなくても終わらない。いつまでも張り合ってしまうようなことがあったかな、と思います。そのくせ、少し離れた局面で自分ひとりになったとき、例えばスポーツ大会で別の種目に出たことがあったのですが、自分がプレーしている間に気になってしょうがないんですね。彼の成績が今どうなっているのか、決勝に残っただろうとかか気になって、常に意識の中にあっような気がします。これぐらいで終われということなので、終わらせていただきます。

志村恵：どうもありがとうございました。ぜんぜん私も知らない話もあって、気にしてくれていたのかと、意外に思いました。では、杉本さんをお願いしたいと思います。

杉本：よろしく申し上げます。女性一人ということで緊張しているのですが、私は一応30代代表ということで、昭和51年生まれで、今年30代に入ったばかりです。もう一人田所直子は去年結婚しまして、今8ヶ月の妊婦なのですが、切迫ぎみで外出できず、今日は私一人でまいりました。私は兵庫県の西宮市で保健師をしております。保健所ということで、家庭訪問をさせていただいていたのですが、その中で、すごく小さく生まれた低出生体重児さん、それもふたごに出会うということが多くありました。そこで、ふたごさんのお母さんの育児の大変さに気づき、そこからいろいろご縁を頂いて双生児学会のほうにも来させていただいています。今日は私の「ふたごとして」のお話ということなので、昨日東京に来まして直子といろいろ話をして、そのときどういう風に思っていたかということをして二時間以上も話して、すごく盛り上がりました。ちょっとお話しさせていただくのにまとまらないので、私は時系列でお話させていただこうと思います。

私は女のふたご、一応一卵性なのですが、一つ上に兄がおりまして、すごく大変でみつごのように育ったと聞いております。母の言葉をかきると「しっちゃんかめっちゃんか」で育ったそうで、母もおおらかな性格でしたので、だからこそ今のように虐待にならずに育てられたのではないかと思う、ということでした。私たち二人は上の兄を見て育ちましたので、わりと楽にずっと育ったと思います。兄が本当に大変だったということに、私は大人になって保健師という職業を通して初めて知りました。本当に兄は「お兄ちゃん」という立場ですごく我慢させられていたと思います。ですので、今訪問に行くときには、そういう家庭に出会うと「お兄ちゃんを優先」ということをメッセージとして伝えています。

先生方は男性ですので、「競争がある」というお話をされていたのですが、私たちはあまり競争というのはなくて、それは女の子ということもあったかと思うのですけれど、遊びの中でも人形遊びなどをして育ったと思います。一年だけ幼稚園に行って、あとは公立の小学校に入ったのですが、幼稚園はたまたま先生方の配慮で同じクラスになって、ずっと二人で遊んでいました。小学校に入

ってクラスが変わったのですが、学校から帰ってきてお友達のところへ行くときには、必ず二人で行っていたということに昨日気づきました。三年生というのが私たちの中ではターニングポイントで、それまでは妹である私わがままというか、何でも「はい！はい！」と言ってしまふたちで、直子の方はわりと我慢をしい子でいたようなのです。それでずっと自信がなかったというわけではないのですが、直子の方が引込み思案だったようです。ところが三年生になった時に、お友達ができて、その子に「直ちゃんって面白いね」と言われて、「私ってそうなんだ」とそこで自信がついたらしいのです。その後どんどん積極的になりまして、今までの立場が逆転というようになりました。それ以降私は、「直子の方が活発」というイメージをもって見ていました。ですから、いつ立場が逆転するかわからないのです。

そんな感じで3年生4年生を過ぎまして、5年の時に父の転勤で岡山に引越したんですね。5年生は思春期に入りますので、その頃の女子というやはりイジメだとか、言葉のイントネーションが違ってからかわれたりだとか、そういうことがありました。中学校に入るとできるだけ目立たなくするというのが一般的に多いと思いますが、直子の場合、正義感が強くて、いじめられている子を庇って逆に自分がいじめられる立場になるということがありました。その時、母に相談するかというそうではなく、ずっと私に何があったか話していました。そこでこれは子どもだけでは埒が明かなくなつて初めて親に相談しまして、そこで学校側と協議してうまく問題が解決したということがありました。直子が言うには、その時親には言えなかったけれど、私に話したことですごく救われたと言っていました。ふたごで一番よかったのは、すごく理解し合えるということだと思っています。楽しいことも含めてその日に話をするのでとても楽になると思います。就職してからも、嫌なことがあるとすぐ話をするのでストレスの発散になるのです。これがもし友達、あるいは職場の同僚であったら、ちょっと変な言い方なのですけれども、その話がいつ漏れるかわからないということもあるわけです。ところがふたご同士で話をする場合、そこで必ず守秘される、という絶対的な安心感というのが二人の中でありました。

ほんとにいいこと尽くめで、何が悪かったのか出てこないのですが、あえて言うとなれば、やはり思春期だったかな、と話をしました。思春期のときに、私は感じなかったのですが、直子が言うには、私のほうが少し成績がよかったようなのです。大きく違うわけではなく2点とかせいぜい4点くらいまでなのですがいつも私のほうがよかったようなのです。でもトータル的にはほとんど変わらないのですけれど、それが本人にとってはすごくコンプレックスだったと昨日聞かされました。だから「そうだったんだ」とすごくびっくりしました。ふたごでも少し優位に立っている側の人はあまり気づかないのかな、と思いました。私は本当に気づかなかつたんですね。でも、そういう劣等感をもっている方は、無意識の中でも気になっていたのだなとわかりました。結果的に高校で私は文系に進んで、直子の方は文理混合に進んで、そこで分かれることになったのですが、そこで直子は「違う道」ということでとてもほつしたと言っていました。そうやって道が分かれて、私は保健師、直子は—今はやめています—建築士ということで、まったく違う分野で仕事をしているのですが、分かれたことで本当に100%応援できる、という気持ちになっています。結婚して離れ離れになっているのでそんなに話すこともないのですが、時々電話で話しをするときは、お互いに励ましあっているという感じになっています。ですから、すごく幸せだな～と思っています。

もう一つ嫌なこととか困ったことは、彼氏ができなかった、というか彼氏がいらなかったことです。これは私たちに特異的なことだと思うのですが、二人があまりにも分かり合えてくつきすぎだったので、別に寂しくなかったのです。もちろん好きな男の子の話はしましたが、なかなか離れられなかつたんです。これが私たちの欠点といえば欠点だな、と思います。とりとめのない話ですがこれで…。

志村恵：どうもありがとうございます。では私が 30 秒くらい話します。ふたごでよかったことは、先ほど三橋先生も杉本さんもおっしゃっていた理解とか安心とか、そういうところですね。口に出しては話し合ったりしませんけれど、本当に自分をわかってくれる他者がもう一人必ずいるっていう安心感はあったと思います。それから、嫌だったとかちよっと困ったことは、能力に差があったとき、自分では別にいいのですけれど、人に言われるのは嫌でした。「真はこんなにいいのに何でお前は…」などという、比べられることが嫌だったと思います。

では、少し話しを深めていきたいと思います。この問題はたぶんお母さんたち、あるいは学校の先生も気になると思うのですが、思春期のあたりの、お互いを意識してしまって、あるいは嫌だなと思ったりする時期の話です。わたしも、母に聞くところによると「何でふたごで生んだのだ。ふたごは嫌だ！」と言っていた時期もあるらしいのですね。相手がうとうしいと思ったり、一人でいたいと思ったり、そういう時期をお感じになったことはありますか。

三橋：やはり思春期の時に外部の目は気になりました。それを親にぶつけるということはなかったのですが、例えば通学に電車を利用していましたが、玄関は一緒に出るんですけどいつの間にかある距離を保って歩いて、車両もどちらがどっちとは言わないけれど別の車両に乗ったりしていました。帰りは野球部員と一緒にいると一緒の車両で話したりしていました。やはり他人の目が気になった時期には、「双子だ」とこそこそ言われるわけではないですけど、すごく気になりました。

志村恵：今の電車のことですが、非常によくわかります。私もそんな記憶があります。杉本さんはいかがですか。

杉本：私は徒歩通学をしていたのですけれど、高校くらいまで近かったので必ず二人で行っていました。帰りは違うのですが、行きは一緒でした。それってもしかしたら性別で違うのかもしれないのですが、でもやはり比べられることは嫌でした。私は英語の発音が苦手だったのですが、母にもう一方は上手くて私は下手だ、と言われたことがあって、それからすごくやる気をなくしたのです。逆に、直子のほうは小学校の時に漢字が苦手、私は好きだったのですが、父に「お前はあかん」というようなことを言われて、そこからすごく嫌になったらしいのです。やはり親のひとは大切だなと思います。あと中学時代、部活を選ぶときに、私たち三人ともピアノを習っていて、すでに兄が吹奏楽部に入っていたのですが、私が先に「吹奏楽部に入る」と言ってしまったので、直子も吹奏楽部に入りたかったらしいのですが、「兄弟三人で同じ部活は目立つし嫌だ」と美術部に入りました。それは今の職業につながっているのですけれども、そんな感じでふたごであることで目立つのが嫌だという時期が思春期にはあったかなと思います。

志村恵：ありがとうございます。今ちょうど上手いぐあいに部活ですとか英語と漢字ということも出てきて、言ってみればライバル的な話ができました。僕はあまり自覚していないのですけれど、あるいは思い出せないのですが、あまり「悔しい」とか「競争しよう」というのは自分ではなかったようです。でも、どうもやはり男の人のほうが競争心、ライバル心があるようですね。そして、それプラスの微妙な住み分けの感覚といいますか、つまり、ライバル心或いは競争心があるがうまく住み分けていくというふたごの知恵みたいなものはどうなのかと気になるのですが、三橋先生、その辺はどんな感じで過ごされたのでしょうか。

三橋：私は幸いそんなに差がなく、例えば一方が常に上にいて他方がずっと下ということがなかったもので、成績的には似ていたし、勝ったり負けたりしていたから、いい競争相手という存在でした。学校でいろいろふたごを見ているんですが、双生児意識も男女というよりむしろその子たちの性格によって異なります。男の子でも女の子でもわりあい大人しいタイプのふたごたちというのはやはり双生児意識も非常に強くて、一緒に登校してくる男の子たちもいますので、僕らは双生児意識の違いは男女の差という感じでは見ていないのです。また、その双生児意識も成長していく中で薄くなったり強くなったりがあります。まあ長いスパンで見れば女の子の方が、卒業して社会人になって家庭に入ってとなっていくにつれて双生児意識が強くなります。それはおそらく男のふたごに比べて、共通な話題 一子育てだったり、進学の相談とか— があったりして強くなっていくのではないかと思うのです。そうすると男の場合、老後になるとまた強くなるのかもしれませんが。僕は「今弟を意識しない生活をしている」と言いましたが、最終的には頼るのは弟じゃないかと思っているので、またもっと年齢が進めばそういうこともあり得るかな、と思うのです。

志村恵：双生児意識というか双生児の仲が、自立していく中では外目からは薄くなるけれど、いろいろな人生の節目に変わっていくと思います。この後、その話に進みたいのですが、その前にライバル心についてももう少し隣に聞きたいと思います。僕は彼にはずっと負け続けていて、成績もだめだったし、運動も彼の方が上だったにもかかわらず、そういうのが比較的平気でした。ところが、あるときどなたかから、ずっと上の立場にいる側の気持ちはどうなんだろう、聞いてみて欲しいと言われ、なるほどその視点はなかったなと思いました。では、ライバル心プラス住み分けに関して、常に勝ち続けた男の気持ちは…？

志村真：それも長く続きませんでした。それは中学校の頃の話だとおもいます。高校に入った時に、違う町に入ってきたというダメージを私はずっと引きずりまして、結局非常に無気力な高校生になってしまったものですから、ほとんど勉強しなくなってなんとか高校を出たという感じだったと思います。ですから中学生の時までは、比較的部活を一生懸命やったり、勉強もそこそこしたのではないかと思うのですが、当時の中学は13クラスあって（1クラス50人近い大きい中学なのですが）1学期2学期3学期の中間・期末試験があって、その間に実力試験が3回くらいあって、むちゃくちゃだと思いますがその成績100番以内を全部貼り出すのです。そういう教育方針の中学で、そうするとやはりお互いの名前がわかるのですね、しかもみんなの前で。そうするとなぜか私の方がいつも上にいたのです。でも能力的にはどう考えても一緒なので、「どうしたのかな〜」と気になってはいました。で、一つの解釈は、「彼は性格上、与えられた問題に対して素直に答えるというより複雑な思考をするので、きっとそれで解答率が下がっているのだろう。自分は非常に単純な性格なのでそのまま答えるからかな」とか思ったり、とにかく自分の中で気にはなっていました。でも基本的には一緒の能力だという確信があるので、気にはなっていないでも大丈夫だと思っていました。

あとクラブについては私は友達に誘われて野球部に入っていたのですが、彼はバスケットに入ってから最初練習がきつくてすぐやめてしまったのです。しばらくいろいろある中で最終的に合唱部か何かに入り、3年生のときかな、彼はすごく楽しそうにやっていて、それを見て「よかったな、すごく楽しそうだな。あったかい雰囲気だな」と思いました。そこにいる友達もとても文化的に見えたというか、自分たちの野球部のまっすぐなど根性路線とは違うものをもっている友人たち、しかも男の子も女の子もいるということで、安心感を持ったりとかうらやましい気持ちを持ったりしていました。ちょっと複雑な気持ちですけれども、彼も落ち着き場所というものがあって、「今日こういうことがあった」とか「こういう友達がいて」と報告されるとすごくうれしかったし、うらやまし

いと同時に安心感を持ったということ、今、杉本さんのお話を聞きながら思い出しました。これは15歳のときです。

志村恵：音信不通だけれども安心感はある。そしてひょっとしたらシニアになってまた仲がもどる。こういったふたごの関係のもどりと言いますか、一時ぐっと近づいたり、また離れたという波があると思います。杉本さんは大変仲のいいふたごさんなのですが、特に今回パートナーの方が結婚・出産という人生の大きな節目を迎え、その辺の二人の結びつきがぐっとなったり薄くなったりとか、具体的にどうでしょうか。男の場合は仕事などで離れて行って、というのがよく見えるのですけれど、女性の場合はどんな感じですか。

杉本：直子は去年11月に結婚しましたので、一年くらい経つのですが、それまで自宅ですっと一緒に過ごしていました。結婚前に彼女が留学しまして、そこでちょっと離れたという体験を持っているので、思ったほど寂しくはなかったですね。ただ、結婚したときは本当に寂しくて、涙をこらえるのに必死だったのですが、直子は自分が幸せになるという確信を持って結婚して行って、取り残されたような気がしてすごく寂しかったと思います。でもすごく安心しましたし、絶対大丈夫と相手のことが思える、というか、相手が幸せであることが幸せ、というような…、そんな気持ちを結婚式のとときに感じました。それ以降、距離的には離れていますが、時々メールしたり電話したりということで、そんなに心理的に距離は離れていないのです。二人の関係は変わらず、そこに向こうの旦那さんが入ってきている、というような状況です。すごく大事なライフイベントなんですけれども、そんなに変わっていない、というのが正直な私の印象です。

志村恵：私たちも、物理的に無理だったので音信不通の時期がありましたが、それでも三橋先生がおっしゃったように、何も心配していないというか、ぜんぜんそれでOKという感じでした。それでこういう機会を作っていただいて、またぐっと近づくということもあります。また、お互いに家族ができて、難しい局面に、例えば入試とか学校とかですが、相談するということはないのですが、会ったときには、人生の同じ段階にいたので話が合うので、また近づくようなこともあるかもしれません。それから、こういう話も聞きたいと思っていらっしゃるかと思うのですが、お父さんお母さんたち、保護者の方は、「どう育ったのか」ということを大変気にされているのですね。特に、公平に扱ったのだろうか、片一方ばかり怒ったり、片一方ばかりかわいがったりしなかったか。大抵の場合は杞憂なのですから、でもすごく気になっていて、どんな会場に行ってもそんな心配を聞かれるのです。先ほどからお話を聞いていると、皆さん親御さんはかなり公平だったのではと思います。その辺の公平感・不公平感は、どうでしょうか。三橋先生は学校の例もご存知かと思いますが、自分も含めてどうでしょう。

三橋：やはり保護者の方は公平に扱いたい、ということが気になっているようです。僕が育ったころは子どものことなんてかまっていられないで、両親は食べていくのに一杯一杯みたいなどころがありましたけど、ただ、東大附属に入れたのは、高校生までは同じような環境を与えてあげたいというふうに思っていたのだと思います。

杉本：私の場合は一つ上に兄がおりましたので、やはり兄対ふたごというような図式があったので、そこでの不公平感のほうが大きかったと思います。ふたごの間では何でも一緒だったように思います。おもちゃでも同じにもらっていましたし。ただ高価なものになるとふたり一緒ということもあ

りました。高校の頃も同じです。ただ、大人になって母と話しをすると、それぞれの個性を大切に育てていこうと両親は話し合ったそうなのです。ですから、ことあるごとに「ふたりは違う道に進むんだから」と、そういえばずっと言われ続けてきていて、大学とか進路を決めるにあたって、やはり母が「あなたはこういうのが向いているんじゃないの？」というような言葉かけがきっかけとしてあった、ということに昨日話をしていて気づいたのです。両親がそれぞれの個性を見極めて導いたというか、自分たちではそれを選んだと思っていたのですが、実は投げかけがあったのだな、という感じがありました。ただ、全体としては公平というか、習い事なども一緒にしていました。

三橋：年の違う兄弟との不公平感というのはあったかもしれませんね。例えば下の弟にしてみればいつもお古を着せられるとか、そういうこともあったかもしれないけれど、うちの住宅事情から、ふたごは一部屋で、下の弟は一部屋もらっていた、とかすべてに平等にはできないので、そういう細かいことでは不公平感があるかもしれません。

志村恵：部屋の問題というのはこれもよく聞かれます。一緒がいいのか別々がいいのか、物理的に無理なこともありますし、どの時点までが一緒がよくてどのあたりから分けたほうがいいのか、などもよく言われるのですけれども。先ほどの、お母さんが個性をみながら少し水を向けてくれた部分というのがあって、あまり用意してはいけなけれど、一人ひとりを大事にしてくれるという、そういう視線がうまく機能して、それぞれの道を見つけていったのだと思います。真の場合は自分の道を見つける、というのは何か重大な決意があったのでしょうか。

志村真：高校のときに、私の意識としては、彼のほうが突然勉強を始めたのです。それでそうなる悔しい私は、「じゃあ絶対勉強なんかするものか」と心に決めまして、それでいよいよ進退窮まって、しょうがないからキリスト教の学校に行って、そこから何かを考えようということで、時間を先延ばしにするような、そんなところがありました。それで家を離れて東京に出て来たのですけれども、そういう意味ではちょっと遅れをとって、重大な決意を持ってではありません。それで時間を稼いで、それから4年後にほんとうの意味で自分を決めなければならなくなって、「そうしよう」と思ったわけです。それは自分で家から離れて住みだして、大学生18歳になってから、寮生活ではありましたが、自立してそこから社会性を獲得するということができてきて、それで決めることができたのではないかな、と思っています。ですから、彼とも離れて家族とも離れて暮らす状況にならざるを得なかった、ということがよかったと思います。あのままずっと一緒に住んでいたら、自分でそういう主体性を18、19歳あたりで獲得できたかなと思うと、ちょっときつかったかもしれません。やはり離れたことで、寂しかったけれども、今度は自分でやっていかなければいけないということが準備できたのではないかと思います。重大な決意はございませんでした。

志村恵：ぜんぜん信じがたいですね。私の解釈では、彼が決意して決めて、その後しょうがないから俺は勉強を始めた、という意識なのですから…。不思議なものです。なんとなく理解しているつもりでも実は理解されていないということが露呈してしまいました。

それではここから少し質問を受けたいと思いますが、何かいい足りないことがありましたらここで言っていただいて、その後質問を受けたいと思います。誰々にということが明白にある場合はご指名していただいて結構です。ない場合は4人でアイコンタクトをして話したそうなお人をお願いしたいと思います。では挙手をして質問をお願いします。あるいは意見や感想でもかまいません。いか

がでしょうか。

野中：いろいろ興味深いお話ありがとうございます。和光大学の野中です。ちょっときっかけということで、気楽な質問なのですが、志村恵先生の前で言うのも変なのですが、世の中にふたごを扱った小説や映画や身近なニュースでもいいのですが、そういうものはふたごであるが故に他の人よりも気になりますか。ご本人からすると。そこで扱われていることを実はご本人だと「そんなことないよ！」とか、むしろ肯けることが多いのか、その辺を直接一卵性の立場からみて感想とかエピソードとかありましたらお聞かせください。

志村恵：皆さんは、小説とかテレビとか映画とか、いろいろ「双子もの」というのがありますけれど、気になりますか？

三橋：気になりますね。いろいろ報道とかテレビとかの取材申し込みが学校にあるのですが、双子ならではのことがあるんじゃないか、例えばテレパシーがあるんじゃないか、というのも僕自身はぜんぜん感じたことがないので、僕の立場だと、あれは興味本位に双子をとりあげて、というふうに思うのですが。実際にある方もいるかもしれませんが。ですから特別自分がふたごだから、というのはないかもしれませんが、ちょっとは気になるのかな。昨日もふたご同士が飲酒運転で追突事故を起こしたなどというのを聞くと「何やってるんだ？」と思いましたし。

杉本：たぶん私はふたごということで、保健師として家庭訪問をするときに双子家庭にはやはりとても親近感を覚えて、だからこそいろいろな問題が見えたというのは、やはり自分がふたごだからかな、と思います。あとわりといろいろな友達から聞かれるのは「同じ人を好きにならないの？」とか、「正直直子の旦那さんに対してどうなの？」とか言われるのですが、まあタイプは似ているというか、気に入るのは同じような感じではあるのですが、好きになるかという点でまったく別物で(志村恵先生大きくなさず)なので、「まったく違うよ」と言っています。あれは虚像だな、といつも思っています。

志村真：ご当地ものという感じで興味はありますけれど、例えば野球漫画で「タッチ」ってありますよね。あれをはじめちょっと読み始めたら、どうも面白くないんですね。ですからほんのさらっと眺めただけでぜんぜん見ていませんし、マナ・カナが出た「ふたりっ子」もちょっと見たのですが僕はあまり面白くなくて。きっかけとして興味は持つんだけど、やはりそれが本当に面白いかどうかというのがすごくあります。今も出ていましたけれど、やはりワンパターンな描かれ方があると、なんか面白くないなという感じで、作品そのものの内容も、ふたごということで親近感は沸くのですが、ふたごだからといって全部ぐっと入り込むということはないです。

志村恵：私は集めていますので興味があるのですが、二つ目の質問の「本当はどうなの？」に関しては、優れた作家の作品では「ああ、そうだな」と思います。「ふたごの気持ちが描けているな」と。でも先ほど出てきた興味本位の、テレパシーだとかステレオタイプで描かれているものにはぜんぜん共感できない、そんな感じです。

三橋：ただ、最近芸能界とかスポーツ選手とかふたごが大活躍していると、どんどんがんばって欲しいなと思います。そうするとふたごが社会の中で市民権を得てきて、それこそ大昔はふたごであ

ることを隠した時代からはじまって、ふたごがマイナーだからと窮屈な思いをするのではなく、ああやって大手をふって歩いてくれたり、ふたごであることを売り物にしないまでも誇りに思ってくれたり、そういうことはふたごにとってはいいことじゃないかと思います。

志村恵：そうですね。ポジティブなふたごのイメージというのが、日本に広がっていけばいいな、と思います。他の方、ご質問はいかがですか。

金子：今日はどうもありがとうございました。ツインマザースクラブの金子と申します。うちはまだ一歳半になる男女のふたごなので、今日のお話は一卵性のお話なので当てはまらない面もあったかとは思いますが、うちは今仕事をしているので保育園に預けているのですが、男の子と女の子なので顔も正確もまったく正反対です。それで保育園の先生がちょっとしたお遊びでうちの男の子と女の子のどっちが好きかという投票をして、半々の結果だったという話がありました。今もツインバギーで行くと「この先生はこの子が好きなのだな」というふうに先生によって先に抱き上げる子どもが必ず決まっています。今日のお話は親御さんのことが中心だったと思うのですが、子どもが幼稚園や学校生活をする上で、一卵性とは言っても性格などいろいろあると思うのですが、そういった先生方との接し方などで気になったことがあったら教えていただきたいのですが。

志村恵：私たち自身の、教師とか外の接し方で気になっていたことということですね。どうでしょうか。ご自分も教員なのでなかなか難しいところかもしれませんが、三橋先生いかがですか。

三橋：反省させられるのは「子どもたちをもっと見なきゃいけないな」ということです。それは何故かという、先ほども話していたのですが、クラスメイトや友達は絶対に間違えないけれど、教員は間違えます。一緒に来てくれると間違えないのですが、別々に来られると間違えることがあります。ずっとふたごがたくさんいる学校にいますけれど、もっと観察しなければいけないな、という反省はありますが、特別差をつけるようなことはないと思います。ただまあ、交友関係なども違って来たりしますし、教科によって先生が違ったりもします。子どもたちにしてみると、数学だったらこっちの先生がいいとか、ふたりが別々の先生に習っている場合にはそういうこともおきますけれど、それは先生方が区別をした結果ではなく、子どもたちの好みもあるかもしれません。

杉本：幼稚園の時は一緒にクラスだったのですが、そういう経験はないですね。ただ今思い出すと、よく遊びに行っていた近所のおばちゃんが私のことを気に入ってくれて、もう一人よりも私というのが結構あからさまだったのです。だからそれはすごく心が痛みました。もう一人のほうも口には出しませんが嫌だったろうと思います。だから先ほどの投票というのは、まだ小さいからわからないとはいっても、すごく傷つく体験だなと思いました。

志村恵：ちょっと信じられないようなことですね。保育所としてはちょっとありえないと思います。そういう教員とかまわり、学校ばかりでなくて地域とか親戚、いろいろ有り得ると思いますが、私が一番嫌だったのは、いきなり何も関係なしに頭を殴った教師です。間違ったのです。こっち(真)が悪いことをしてパコーンと。これもひどい話です。あと弟を目の仇にした教師がいて、「お前が気に入らん」と殴るひどいのがいました。僕はなんかかわいがってもらって、あからさまなえこひいきをされたのはあれだけですけれど、嫌でした。何か世の中で理不尽な比較というか、そういうのはあった？

志村真：僕は比較というよりもむしろ、片方の問題を両方まとめてしかられるということが多かったのではないのでしょうか。小学校の職員会議でどういう決定があったのかわからないのですが、3,4年生で同じクラスになったのです。1,2年生、5,6年生は別のクラスだったのですが、実験的なことだったのかもしれませんが、3,4年で一緒にクラスだったのです。母親と同じ世代のとてもいい先生だったのですが、やんちゃなギャングエイジですので、ふたりでまとめてしかられるということが多かったです。それはお互い納得して叱られていたのだと思います。

志村恵：それでは次の方をお願いします。

空井：空井と申します。ふたごの親をしております。古いです。三橋先生にお聞きしたいのですが、先ほど三橋先生はさらりと「僕は長男だから両親を扶養して」とおっしゃいましたが、私も扶養される立場が近くなってきて、さてどちらが名乗り出てくれるかな、と今深刻な思いで話を伺いまして、今度のお正月に二人の娘が孫を連れて来たときには投げかけてみよう、その答えによっては遺産相続も…と、一人で自分の世界に浸ってしまっていて、これは居住地の関係とかそれぞれの職種によって自然に淘汰されて決まってくるのでしょうか、やはり心情論としては「長男だから」というふうに長男意識というのは一歩抜きん出るのでしょうか。このチャンスに先生のお気持ちをお聞きしたいのですが。

三橋：若干あったのは事実ですし、弟たちがそれをうまく利用したというのも事実です。「兄貴は長男だから」と。もう一つは、弟は前橋に大学からずっと行って、向こうで結婚して向こうで勤めて、大学のときから両親と一緒にではなかったですし、一番下の弟は大学は実家から通いましたが、就職が武蔵小杉の方だから自分で下宿すると言って、一まあ私も教員になりたてのときに三宅島で三年間ほど教員をしていたので、やはり一回家を出てみるというのは大事なことだと思っていたので一弟も外に出ていまして、そんなときに私の結婚が決まって、もともとそこから学校時代も通っていましたので地理的にも通勤に便利だったのもありまして、わりあいすんなり同居することになりました。

空井：どうもありがとうございました。三橋先生のお名前を今後使わせていただきたいと思います。

杉浦：ツインマゼースクラブの杉浦です。今日はありがとうございました。うちの娘ももうじき志村先生の年になるというところで、杉本さんよりずっと年がいきます。今日いらしたふたごさんは皆さん幸せだなという気がしますし、お母様がたはさぞや皆様の成長をうれしく見ていらっしゃるのだらうと思います。

今ちょうどツインマゼースでふたごのアンケートをとらせていただいているのですが、学齢期の方のお母様の質問で多いのは、やはりふたごの学力の差で、先ほども三橋先生はほとんど差がなかったからとおっしゃっていましたが、志村先生も杉本さんも、一時期は差があったけれど安心だったと、やはり相手のことを思って安心だとおっしゃったと思うのですが、うちの娘もきっと同じ能力は持っていると思うけれど何が違うかということ、やはり勉強した子と勉強しない子の差が出たと思います。やはり中学で高校受験のときに、一人が勉強しないでいたら「どうするの！」と真剣に相手を怒っていたことを思い出して、先日も二人で「本当にあなたは勉強しなかったね」と話していました。私はもう済んでしまったことですが、これからふたごをお育てになるお母様への示唆と

して、決してそこで差があっても心配しなくてもいいということが一つ言えるかなと思うのですが。ただそのときの扱い方として、先ほど平等の話が出たときに一親から見るとは違うなと思ったのですが、同じものを与えてくれたとか、そういうこともさることながらお聞きしたいのは、平等にしたいと思って、片方が賞をもらって片方がもらわなかったという場合に、年の差があれば祝賀会ができるのですけれど、同じことをやっていて、あるいは同じ時期に受験をして、片方が先に決まった場合の祝賀会というのは、母親としては少し控えるのですね。「どうして私が先に決まったときにはあんまりお母さんは喜ばなかったのに、こっちが決まったらこんなに喜ぶの？」と言われたとアンケートに出てくるのです。その場合にそれほど気を使ったほうがいいのか、あまり覚えていらっしやらないかもしれませんが、母親の扱い方についてどう感じたかお聞きしたいと思います。

志村恵：昨日その話をしていたので、では真、どうぞ。

志村真：たぶんこうだろうと思うのですが、私たちの関係においては、例えばおにぎりがあって、二人で分けて食べなさい、というときに、分けたらちょっとこっちが多くて向こうが少なかったとします。それをお皿に盛って食べなさい、と言われたら、ふたごの場合自分の方が多かったら少しとって彼に分けると思うのです。親がどう与えようと自分たちの間で調整するというか、分け合うと思うのです。そういうことが基盤にあって、例えば彼が賞をとって自分がとらなかったときに、彼の賞をよるこぶことをしないということは私にとっても辛いことになるのです。「なんでお母さん、恵がとったのに喜ばないの？」という気持ちだと思うのです。もちろん悔しい気持ちもあると思いますよ、両方あると思うけれども、彼が何か頑張ったことを家族が喜ぶ機会をもたないことは、私にとっても喜びではないのです。だから一緒に喜ぶことが喜びになるのではないかと思います。もちろん悔しいことはあるのですよ。悔しいことと彼のパーティをするということが自分の中に一緒にあるのです。それでいいのです。ということで、私としては、例えば彼が試験に受かって僕が落ちたとしたら、彼が受かったことを喜んであげて、その代わり僕が落ちたことは皆で残念がって、という気持ちかなと思うのですが、他の方、どうでしょう。

杉本：私もまったく同感です。私の場合、私はストレートで入ってもう一人は浪人しているので、まさにそのような状況だったのです。うちの場合は「二人のうち、とりあえず一人だけでも受けてくれた」という感じだったのです。まったく進路が別だったというのもあったかもしれないですね。だから私の合格発表を、私が行けなかったのもう一人が見に行き、すごく喜んで帰ってきたのです。うらやましいとかいうのも全くなくて、すごく喜んでくれた。あっさりしていたので祝賀パーティもしましたし、残念というのはあったのですけれども。同じ進路で同じ大学だったら、微妙だったかもしれないのですが。ただ、ふたごって、お互いに調整しているなって思います。例えば、向こうは一浪したけれどこちらは受かったから親に対してはいいや、と思いますし、私は30になりますけどまだ結婚していないのですが、とりあえず社会的にはもう一人が結婚してくれて親に安心感を与えてくれていると考えたときに、私も今のままでいいかな、と思ったり。そんな感じでお互い調整していたので、逆に先ほどのお話みたいにパーティをしないということになると、かえって惨めになってしまうかもしれないと思いました。

三橋：片方が賞をとってもう一人がもらえなかったからといって喜んであげないということは、悔しいだけじゃなくて、また親から「あなたも頑張るとりなさい」というプレッシャーをかけられたようにとることもあると思います。大学の進路のように自分が何をやりたいか決まってきた場合

には決して相手と競争しようと思わない。たとえ自分が浪人してもどうしてもここに行きたいのだ、私はこの大学で頑張るんだという意識ができてくるので、うちの高校生たちを見ても、大学受験の時にはそれはないのだと思います。しかし、学齢期が下の時には気を遣ってあげる必要が確かにあると思います。

志村恵：私もまったく同じ意見です。ある程度の年齢になっていけば、萩原兄弟も言っているのですが、「悔しいけれどうれしい」んですね。僕も経験があるのですが、片一方が成功したことを「ちょっと悔しいかな」と思うのですが、次の瞬間には友達に彼の自慢をしているのです。そういう意味でお互いに調整力があるということは大事だなと思いますし、子どもには育つ力がありますので、その部分はかなり信頼していけばいいかと思います。

ただ三橋先生がおっしゃったように、学齢期の、小さいときの学力差というのは、例えば学習習慣とか生活習慣にもかかわってくるので、プレッシャーをかけるのではなくうまく励ましてあげる、寄り添いながら励まして、その子にうまく伸びて行ってもらおうというふうにしたらいいのではないかと個人的には思います。それから皆さん悪いことをしたらふたごでもすぐ叱りますよね。どうしてほめるときにだけタイミングを逃すのでしょうか。叱るときはぱっとすぐ叱るように、うまくいったときもぱっとほめてやると、微妙な気の遣いあいのような神経戦がなくて楽なんじゃないかな、と勝手ながら思いました。

天羽：あの、ホントにいいお話を伺って、明日名古屋で会がありますけれど、先生方のお話で、こういうことがありましたと言えることがうれしいと思います。だいたいお母さんたちがそこらへんが一番問題になっていることなのですね。ただ、皆さんたちが一卵性で、能力がそれほど差がないですけど、二卵性の場合、二卵性が増えてきているもので、差が固定してそのままいっているようなので、これから先ふたごだからといって必ずしもそういうことはないかもしれないと思って。今回、学齢期のアンケートをとって感じましたのは、その間に 19 歳以上のアンケートでは 72%の回収率があったのですが、今度は 35%くらい、半分で、しかも二卵性の回収率はぐっと落ちるわけです。ですから、そこらへんで一卵性のお母さんたちはとても細かい観察記録があるのですが、二卵性の場合わりと関係が固定しているせいかあまり詳しいものがない、そしてその間で娘と母親というところで、その違いというところに関して、自分と似ている人とそうでない人と、多少愛情の違いがあるというようなことを正直に書いていらっしゃる方があって、そこらへんも二卵性のふたご育てというものが少し違ってくるのではないかと思います。今度もしこういう機会があったら二卵性の方のお話も聞きたいと思いました。どうもありがとうございます。

志村恵：先ほども、一卵性、二卵性で若干兄弟の考え方も違ってくると話していたのですが、三橋先生、卵性がしっかりわかっていることで、やはり能力差などの了解がしやすいという感じですか？ つまり、二卵性の場合、二卵性とはっきりしていると差があってもある程度は「俺たちは二卵性だから差があっても当然なのだ」あるいは「男女の二卵性だからこれだけ差があっても当然なのだ」と、子どもたちが納得しやすいということはないでしょうか。

三橋：僕らは外から見ていて、「これは年の違う兄弟と同じなのだ」という気持ちでみていますけれど、子どもたちがはたしてどうかということその辺のギャップはわからないですね。まあ異性の場合には割り切れると思うのですが、同性の場合には、やはり一卵性とはまた違うライバル心のようなものがあるのではないかと。それと二卵性の場合では、こんなこと東大附属学校の立場で言うてはい

けないかもしれませんが、早く世界を分けてあげるみたいなこともいいのかもしれませんがね。どうしても同じ土俵の上に乗せておけば比べたがるのがよくあるので、差があればそれぞれに合ったところに早い段階で分けてあげるのも一つの手かもしれません。

志村恵：フロアに逆にお聞きしたいと思ったのが今のことです。二卵性のお子さんを育てられて、高校生とか大学生とかそれ以上になった方がもしいらっしゃったら、フロアのほうからも少しお話し下されば、と思います。今の学力差や能力差などについてです。二卵性のお父さんお母さん、どうでしょうか。

会場から：すみません、ちょっとお伺いしたいと思っていて、ちょうど二卵性のお話になったので伺いたいのですが、うちはツインマザーズクラブのほうで調べていただいて二卵性とわかった娘が二人なのですが、高校三年になり大学受験なのです。一人が登校拒否になったりしまして、高校は違う学校なのですが、一人は部活で友人関係が増えてものすごく楽しい高校生活を送ったと本人が言っています。もう一人は私立の受験校、受験勉強一筋で、友達ともほとんど付き合いがない勉強だけの学校に行ったのですが、結局同じ進路にもどってしまいまして、大学から学部まで全部同じなのです。私立の、受験勉強をやっていた子のほうがずっとちょっとだけ成績がいいのです。その子はこのままいけば第一希望も受かると言われていますが、受験勉強をしていなかった子もこの一年ですごく頑張りましてなんとなく目標が見えて来たところで頑張っているところなのですが、これが発表のときに親がどのように接したらいいか、ということに困っています。他を見るようにも言いましたが、やはり二人やりたいことが一緒に、未来についても同じようなことを言っているのですが、どのように親は見えていったらいいのでしょうか。

三橋：お母様が考えるよりも、子どもたちの方がはるかに割り切って考えているのではないかと、しかお答えできないですが、あまりご心配なさらないでもいいんじゃないかと思えますけれど…。

志村恵：まったく同感です。たぶんその志望をふたりで見た時に、ふたりにはそういう事態はわかっているはずで。親御さんは辛いのは当然です。そのことは子どもにも伝わっていますので、その部分で大丈夫だと思いますが…。実際にお会いしていないので断言はできませんが、頑張っていくのではないのでしょうか。あまりお答えになりませんが…。

末続：ツインマザーズクラブの末続と申します。私の子どもは41歳になります、男女のふたごでございませぬ。それぞれ家庭を持ちました。競争意識ということですが、私もアンケートの男女のほうを見ているのですけれども、数は多くはないのですが、やはり男女の場合は生まれたときの体重差、身長差、健康差というのでしょうか、それによって小さい時の力関係は影響されているようなのです。これは普通の子どもでも、小さいときは男の子は弱く病気をしがちなのですが、やはり男女のふたごの場合はパーセンテージからいくと男の子のほうが弱い、小さい。そうすると親の関心がどうしてもそちらにいつてしまつて、女の子は手がかからないのですね。そうしますと、お母様たちはどちらが上・下とは意識しないようにしているのですが、小学校にあがるくらいまでは女の子の方が世話を焼く、姉的な性格を持っている場合が多いような感じがするのです。それで競争意識がないとは言いつれなくて、いろいろなパターンなのですけれども、私自身の経験でいいますと、娘の方がずっと中学校の終わりまで体格なども上だったのですが、小学校の時に逆に体格がよくて運動も目立つてしまつてという時に、一親はそれぞれでいいと思つていたのですが一 勉強の面で男の

子に比べると劣っているのですね。その時期はまわりの子が比較するのですっかり算数嫌いになりまして、息子の方は何がなんだかわかっていないのですが、算数の勉強中にそばを通るたびに「見た」「見ない」のケンカになりました。それで中学から本人の希望で別々になりましたら、親がびっくりするほどその後は仲がよく過ごしました。ただ私が今とても知りたいと思いますのは、男女のふたごさんと結婚されてある年数を経た方たちが、どういう関係のご家族を作っているのか、ということです。うちではお正月などは集まりますが、ほとんど、普段連絡しあうこともないのです。でも、息子のお嫁さんはとても彼のふたごの相棒が気になるようなのです。男の人はそんなことはないのですが、それでギクシャクしたことがあります。本人同士は電話で「僕たちは変わらないよね」と話したようなのです。お嬢さん同士のふたごさんが結婚されて、いろいろあるとは思いますが、とても仲良く行き来しているというお話を聞きますと、親から見ますと、男女のふたごの場合これから年を重ねていって、どういう関係になっていくのかな、と。それから、年をとってきて先ほどの「世話をする」という話ですが、私たちの子どもの世代だとまだなんとなく、特に男女で男が一人しかおりませんから娘から見ると彼が「長男」だからいずれは世話をするのが当たり前というのがあるようなんです。彼は何気ない時に「お父さんかお母さんが一人になったら考える」と言っていたので、主人と「もうこれは子どもには頼れないな」と冗談に話したのですが、特に男女のふたごさんは私の頃は少なかったのですが、今はとても増えているので、ゆくゆくそのようなお話を聞けたらいいな、と思っています。

志村恵：私たちはこの男女のふたごの行く末といいますか、特に結婚した後ということは、個人的な体験としては語れないのですけれども、三橋先生、卒業生で何か思いつきになりませんか。わからないですか。どなたか会場で結婚したあとの男女の例についてご存知の方がいたらお願いしたいのですが、いかがですか。ないですか。それから結婚した後のお互いのパートナーとの微妙な問題というのは、心当たりはありますか。私の場合は、仲がいいので、若干妻が嫉妬した時期がありました。結局はふたごの世界というのは夫婦の世界とは別の世界なのだ、ということで納得したそうです。ふたごの配偶者の心理的な研究というのも面白いのじゃないかと勝手に思っていますが。そういうのはないですか。

志村真：私の妻の場合はないと思います。というのは、距離的にかなり離れていた時期があったものですから、その時期に私たちの結婚としての最初の15年があったので、具体的には九州に私たちが住んでいて、彼らが名古屋、金沢ということで距離があって、お正月にも帰れない勤務だったので、最初の夫婦関係を作る時期がふたご間での音信の途絶えた時期だったということで、まず夫婦の関係が形成されて、それからまたやり取りが出てきたので、そのあたりで彼女が何か思うということはなかったようです。

志村恵：僕の方が結婚が遅かったのですね。すみません、男女の行く末はこの辺りでおしまいにしたいと思います。でも非常に重要なことですので、今後もいろいろな方に追跡していただきたいなと思います。よろしいですか。他はいかがでしょう。

酒井：山梨大学の酒井と申します。貴重なお話をありがとうございました。私のゼミの修士の学生で一卵性双生児の学生さんが、選んだテーマが「ライバル心」だったのです。それで皆さんのお話がたいへん興味深かったのですが、彼はふたごで何かいろいろ比較をしたいということで、比較する項目をたくさんあげていって、勉強とか、お話をでたようなこととかですが、その中に「友人の

数」というのを彼が選んだのです。そこに僕は大変興味深いなと思って、僕は友人関係の研究者なのでそういった視点からもぜひ教えていただきたいのですが、二人でいらっしやって、中学生くらいの時期に、共通の友人というのがあると思うのですが、お互いに友達ができたときに相手に紹介するのか、そうではなくて自分だけの友達といいますか、自分たちの世界とは別にとっておくのか、そういう友人関係の広がりという点が興味深いと思って、ぜひ皆さんのエピソードをお聞かせいただければと思います。

杉本：中高では、小学校のときのように一緒に遊ぶということはまったくなかったように思います。ただ、友人の数ということでは、そういえば年賀状の数が、比較とまでは言わないのですが、少し気になったなというのを今思い出しました。

志村真：中学と高校のところで引越しで断絶があるのですが、中学のときは部活も違っていたということでそれぞれの友達でした。紹介しあうというのは基本的にないのですが、高校のときの友人について言えば、僕の友人関係というのはちょっと希薄というか浅い関係で、まあジョークを言っているだけの友人が多かったのですが、彼の友達で結構面白い人たちがいて、クラス替えの影響なんかがあるんですが、この彼のグループの人たちはすごく面白かったのが僕が入れてもらったという感じです。大学のときの友達に関していえば、それぞれが休みを利用してお互いの大学に遊びに行き、そこで仲間の間に顔を出すというか、紹介といえばそうなんですけどその中で交友が広がったということできていたと思います。

志村恵：中学生、高校生の時は、家に遊びに来るということもあまりないので、紹介し合うというチャンスもあまりなかった気がします。特に中学ではおそらく精一杯自分を広げようとする時期なので、これは僕の友達、僕の世界という意識もなかったんですが、多分一生懸命自分の世界を作ってたんだなあという風に振り返りはできますね。そんな感じです。他のふたごの経験も今後ぜひ聞かせてください。交友関係について、よろしくお願いします。

空井：臨床心理士としていろいろなお母様達にお会いしてふたごの会にもいろいろ私なりに機会をいただきまして、そこで長年生きてきて、ライバル心が強いとか公平感をどうしようとか、二人の差をどうしようか友人をどうしようかと、皆さんの今日のお話を聞いてもっともだ、そういうお話をいつもお母さんたちから耳にすることだなというのを改めてわかりました。私は臨床心理士として心理学を専攻した者として、私なりの結論に近いものですが、元の問題は母子関係さえちゃんとしていけば、二卵性であろうが一卵性であろうが兄弟が何人いようが、それはそんなに重要ではないという風に私は最近思うようになりました。問題を持っているお母さんたち、ふたごちゃんたちにお会いしますと、母子関係というものを、もう一度やり直すということで、たいがい先が見えてくることが多いものですから。ライバル心がなんでふたごちゃんの時に非常に話題になるかといいますと、私が思うには、一人の母親を同列で同じ年齢で同じ発達レベルで求め合うというのは、生まれたときからライバル心がない方がおかしいので、一人の母親を奪い合うというのはすごく頭を使って生まれてきています。ですからいい事といえば順番が来るまで待つということをや、ゼロ歳から学習していますので、差があってもお母さんは安心して子どもにおっぱいを飲む時間も待たせてあげてくださいというのをお伝えするようにしています。子どもに「待てばお母さんが必ず自分に言葉をかけてくれる」「順番をちゃんと守ってくれる」という保障を与えていただけたらありがたいな、と思ってお母さんたちをお願いしています。ですから二卵性か一卵性か男女かなどと

というのは、私の中ではそんなに重要には思っておりません。ちょっと極端な経験を通して、この際皆さんのお耳にちょっとだけ置かせていただこうかなと思いました。時間をありがとうございました。

志村恵：どうもありがとうございます。何かほっとする気持ちです。だいぶ時間が来てしまったのですけれども、あと一個か二個、質問をお受けしたいと思います。

野中：もう一つよろしいですか？ 今のお話を聞いていて、今後ふたごの話は、一卵性だけじゃなくて、二卵性でも性別、同性か異性かによっていろんな広がりがあるということに改めて感じました。今日たまたまとはいえ一卵性の方に演壇に立っていただいて、私が一番印象に残ったのは、志村真さんの中学時代の成績が違う時に「本当は同じだという確信に揺るぎがない」とおっしゃって、それがやはりそうなんだなというふうにあらためて思いました。私も男の年齢の違う兄弟がいますから、年齢が違っても二卵性くらいの経験があるわけですが、その確信は僕にはないですね。ふたごの研究をはじめさせてもらって、一卵性といえども別の人格であり、それをどう育てるかというのがお母様方の悩まれるところであり、比べられることが嫌だとかいうことも長年やっているところであり、比べられるほど聞いているし、理念的にはわかっているのですが、やはり一番今日あらためて思ったのは、一卵性の方にはそういう確信がある、ということです。そういう意味では私からすると、自分の実感を超えた存在だなというふうにあらためて思いました。例えば杉本さんのおっしゃった「絶対に安心できる存在である」というのも、それに近い感じがしたのですね。そこに特化していうと、もし感想があればお聞きしたいのは、たまたまお三方ともある時期まで一緒に暮らしていて別れた、つまり逆に言うと、一緒に暮らしていた時期は本当なら同じはずだ、環境が違うから今の差があるのであって、本来は同じはずだと思うのでしょうか。僕などは悔い多い人生を送っていますが、「たら」「れば」のことを考えても想像でしかないのですね。「あの時こうしていればこうだった」と言っても夢物語でしかない。でも一卵性の方は、「世が世なら、もう一人の自分である」という感覚がおありなのではないでしょうか。それと同時に、おそらく高校卒業くらいの年齢でそれぞれ分かれる経験を持った例が多いと思いますが、そうするとやはり環境によってさらに変わってきたという感覚がおありかどうか。ちょっとまとまりのない質問になってしまいましたが、何かありましたらお願いします。

志村恵：これは「遺伝と環境」というか、ふたごの本質的なテーマでもあります。ある時期まで同じ家庭で育ち、ある時期から分かれて今の私たちがいるわけですが、自立ということも含めて今のご質問に答える形で一言ずつまとめていただき、今日のシンポジウムを終わりたいと思います。そういう意味でいい質問をありがとうございました。ちょっと難しいところもあるので、そのご質問にぱっと的を射る形で答えるのは難しいかもしれませんが。

三橋：確かに似てはいましたけれど、やはり小さい時から「弟とは違う」という違いを意識していましたから、これが離れても離れていなくても違う、という意識はずっとありました。けれどもよき相談相手だったり、パートナーだったり、ライバルだったり、というのがいいのかなと思います。今ここで、一卵性双生児という立場で話していますが、実際にはそうでない世界や環境を知らないのですよね。年の違う兄弟で生まれてきたという経験を知らないの、今僕らが言ってきたことが正しいことかどうかというのは、もう一度年の違う兄弟として生まれ変わってみたいとわからない、というのが問題なのです。一卵性双生児として生まれて育って来てしまったので、本当に他

の世界を知りません。それでも、双生児の関係は「いいものだな」というふうには感じています。他にもっといい兄弟関係があるのかはわかりませんが、今日はありがとうございました。

杉本：ふたごはたぶん別物なのだと思います。ただキャパシティというか、可能性の部分は一緒のものを秘めているのだらうと思いますが、表現のしかたが違うのだな、というふうに思います。私たちは別の道を選んだのですが、相手のことも話を聞くことによって体験できるというのがラッキーだと思っています。共有できるので。先ほど会場のお話で、同じ進路を選ばれて、というのが印象に残ったのですが、たぶんどんな結果になっても、そこできっと差はもちろんできるのですが、また違うことが起こってプラスマイナスゼロ、という気がします。今私はすごく感じているのですが、両親との関係においても、甘えられない時期があったのかもしれないけれども、別の時期に甘えていたり、ふたごの中で調整していたのかな、と思います。ふたごはとても居心地のいいものだな、と感じています。

志村真：自分の中で、ふたご同士で似ている部分と違う部分が常に同居していて、お互いに受け入れあうという関係だと思うのです。ですからライバル意識であるとかそういうことも含めて、なんと言えいいのでしょうか、同質性と差異性と言いますか、それがそのままそっくり両方あって存在しているということをお互い受け入れ合うという形の理解をしていると思うのです。例えば中学で言うと、試験の成績というのは評価の基準として非常に大きいウェイトを、その中学生の人生では占めてしまっている。そういう中で、「彼はどうしたんだろう、同じ力があるから大丈夫だろう」という確信が、だんだん大きくなってくると、評価の基準というか評価の尺度というものを広げていくと思うのです。そういう意味でいろいろな違いが出てきても、人間として安心できる存在なのだろう、というふうに広がってくると思うんです。評価とかお互いを受け入れる、ということも成長してくると思いました。

最後に一言、いったん離れていた関係が少し近づいてきたというのが今の時期なのですが、そのきっかけを与えてくださったのがこの双生児研究学会です。2年前の金沢大会の時に電話がかかってきて「お前も来て何かしゃべれ」。その一言で私の人生がふたごに向けて再び動き出したということで、皆様に心からお礼を申し上げます。

志村恵：私は、先ほどの質問の「ずっと同じ家族にいたらどうなっていたか」ということには、やはり別物になったと思います。どういうきっかけかわかりませんが、ふたごは必ず自立のきっかけをつかんでいきます。それは家から出ることかもしれないし、結婚かもしれないし、クラブ活動かもしれないし、何かわかりませんが、自分の世界を見つけていくきっかけが必ずどこかにあるんじゃないか、と思います。今回このようにふたごのことを振り返って「大人になってもふたごはふたご」と、これは大人にならないと言えないというか、あるいは語れないということも多いと思うんです。思春期の生の声ではありません。こうしたことを語れるようになるまでの年月というものがある程度あって、このように皆で話げできたわけです。また、このようなチャンスを生かして、杉本さんのところも僕らも昨日話げできたようで、そうやって振り返る機会があつていいんだな、と実感しました。真が今お礼を申し上げますけれど、私も今回このシンポジウムで微力ですけれどもコーディネーターをさせていただきまして、お蔭でますますふたごが楽しくなりました。今日はどうもありがとうございました。

安藤：ありがとうございました。私もふたご世界というのがただ単に遺伝と環境という研究だけで

はない、深まりがあるということであらためて実感できる、非常に多岐にわたった興味深いお話だったと思います。ありがとうございました。

<追記> 収録テープの交換の際、特に三橋先生の発言の一部が録音されず、ここに掲載することができませんでした。お詫び申し上げます。

第 12 回国際双生児研究会議に参加して

今泉 洋子（兵庫大学健康科学部）

2007 年 6 月 7 日から 10 日にかけて、ベルギーのアントワープ市内にあるアントワープ大学で国際双生児研究会議が開催された。アントワープ市の旧市街地には 14～16 世紀に建築された数多くの教会が残っており、多くの観光客でにぎわっていた。アントワープ大学は旧市街の中心部から徒歩 10 分以内の所に位置していたが静かなキャンパスであった。日本からの参加者は研究者 9 名、学生 4 名、同伴者 1 名の 14 名であった。第 6 回～11 回まで連続で参加していた、ツインマザーズクラブ会員の参加者がゼロであったことは残念であった。なお、全参加者数と参加国数は不明であるが、これまでの国際会議に較べやや小規模な印象を得た。

7 日の夕方から開会のパーティーが大学の中庭で開催されたが、これに先駆けて多胎妊娠に関するシンポジウムが 10 時から行われ、日本からの参加者は筆者を含め 2 名であった。

3 日間の全体的な構成としては、開会式に続き招待講演に当たる Keynote lecture は Dr. Roger Short による “The Life and Death of Chang and Eng” であった。演者は多くのスライドを駆使して、シヤム結合体双生児の Chang（チャン）と Eng（エン）の生涯について話された。チャンとエンは双子姉妹のアデレイドとサラ・アンとそれぞれ結婚し、チャンは 11 人の子ども、エンは 7 人の子どもを残し、チャンは 1874 年 1 月 17 日に死亡、エンは 3 時間後に 62 歳の生涯を閉じた。続いて、ベルギー国王の長男であるフィリップ王太子とマティルド妃殿下をお迎えして、J. Kaprio 教授の会長講演 “Twin studies in the 21 century” が行われた。王太子は双子の卵性についてご質問をされた。会長講演後は、3 会場で同時進行のセッションが 9 回 (27 種類：P1～P27) 開催された。このうち、3 種類は COMBO (I～III) が主催していた。Keynote lectures を以下に記す。

“Twin-to-twin-transfusion syndrome” by Dr. J. Deprest, “The genome twin project” by Dr. L. Peltonen, “Twinning after infertility treatment (ART)” by Dr. J. Gerris であった。同時進行セッションでの口頭発表以外の発表は全てポスター発表であった。同時進行セッションのタイトルとして、セッション P19 の “Genetics and epidemiology of twins” で Dr. G. Sirugo は西アフリカのガンビアにおける 2 卵性ふたご出産率について報告した。ガンビアのふたご出生率は 2% と高く、このうち 70% 以上が二卵性であった。また、他のセッションにおける多胎出産率の報告によれば、アメリカと日本のふたご出産率は現在も上昇しているが、イギリスを始めヨーロッパ諸国でのふたご出産率の上昇は止まり、横ばいで推移していた。

8 日夜の Gwt-together Reception はアントワープ大学から徒歩 10 分以内のところにあるアントワープ市庁舎で開催された。9 日夜の Congress Dinner は 12 世紀に建築され、その後改修されたフランドル伯居城内の中庭と 1 階の会議室を使い開催された。筆者は第 3 回から 12 回までの国際会議に参加した

が、今回の国際会議はヨーロッパの学会の感がした。閉会式にてポスター発表をした優秀学生の表彰があり、3名が受賞した。嬉しいことに、Gedda 賞は東京大学大学院生の高橋雄介さんが受賞した。

第 12 回国際双生児研究学会に参加して

浅見 恵梨子（奈良県立医科大学医学部看護学科）

2007年6月8日～10日にベルギーのアントワープで開催された 12th International Congress on Twin Studies に参加してまいりましたのでそのご報告をいたします。この学会は3年ごとに開催され前回は同じヨーロッパ内のデンマークで開催されたそうです。

今回のメインテーマは Twin and multiples – a life course perspective で“双生児と多胎、その一生の俯瞰”といったところになるのでしょうか。3日間の会期のうち、それぞれ1日ずつ「受胎から幼年期」「青年期から成人期」「老年期および長寿研究、縦断的研究」と、サブテーマごとにくくられていました。会場はアントワープ大学内の Het Pand という中世の薫り漂う建物で、3つの部屋を使って合計 27 のオーラルセッションが、回廊を使ってポスターセッションが行われました。また、初日と2日目には Keynote lecture があり、例えば双胎間輸血症候群やゲノム計画、不妊治療後の双胎といった多胎研究のトピックス的なものが散りばめられ、十分に英語が聞き取れなくてもスライドのパワーポイントを見ているだけである程度内容が理解できました。（それでもわからない単語は辞書で引きながら聞くのですが、目の調節が利かず、変なところで老いを感じました・・・）

今回日本からは 10 数名の参加があり、ポスターセッションにも 10 題の発表があり、その数はもちろんアジアでは日本が最も多胎研究に取り組んでいることを示すものでした。

私は助産師なので関心のある分野もおのずと妊娠や、産後の育児支援関連になってしまいましたが、日本の研究と諸外国のそれを比較して動向の違いを感じました。日本では多胎の育児不安や育児負担の実態調査といったいわばエビデンスの蓄積に関するものが主流なのですが、諸外国では支援のシステム構築や親教育のプログラム開発など、次のステップに関するものが多く目につきました。諸外国ではすでに実態把握などのリサーチ活動は終えているのか、それとも研究のフォーカスポイントが違うのでしょうか？ そういえば英語の文献を見てみても日本語でいう育児不安や育児負担に相当する単語は見つけにくいのも事実です。

私自身、国際学会に参加するのも発表するのもこれがまったく初めてだったので、当初はかなり緊張しました。ポスターは同じ大学の英語教員のサポートを受けながら出発前日によく仕上げましたが、現地に行ってもまずは英語が理解できるか、質問に答えられるか、ぐるぐる頭をめぐりました。しかし結論として、とにかく英文を書かなきゃ始まらないということ。今回自分で書いてみたのですが、英文は似たようなフレーズやタームが出てくるので、パターンがわかれば何とか書けるもんだと実感。それに、日本の研究レベルは決して国際的に見ても遜色ないということ。いかんせん、英語でプレゼンテーションできる人が少ないので研究内容が伝わらず、かなり日本人は損をしているとこれも実感。しかしながら、今回の日本の発表者は第一線で活躍されている先生方のほか、若手教員や大学院生も多く、将来の日本の多胎研究の担い手の頼もしさも感じました。

せっかくの国際学会の報告なので学会内容以外のことも少し触れますと、まず初日にベルギー王室の皇太子の弟にあられる殿下、妃殿下の行啓がありました。何かの本で読んだのですがこのご夫妻には双子の王子がおられるそうで、その関係からお見えになったものと推察します。光栄なこ

とに回廊で立っている私たちにお声をかけられ握手していただきました。緊張で何も言えませんでした。

また、今回の開催地であるゲントの素晴らしさは特筆すべきものです。ベルギーというと多くの日本人が思い浮かべる観光地は首都ブリュッセルやブルージュ、フランダースの犬で有名なアントワープくらいで、ゲントを思い浮かべる人は少ないと思います。そのせいか日本のガイドブックにも2～3頁くらいしか紹介されていず、正直私も観光地としてはそんなに期待していませんでしたが、中世の街並みそのままのたたずまい、コーレンマルクト広場から眺める鐘楼、聖バーフ大聖堂の景観、軒先を飾る色とりどりの花々とギルドハウスを映す運河……、もうすごく気に入りました。聞けば郊外にはホンダの工場もあり日本とは縁薄からぬ関係にある町だそうですが、ベルギーは緯度も高いため、

6月では夜9時半頃まで明るく、夕方以降も十分散策を楽しめました。それに食べ物が美味しい。ゲント名物のワテルゾーイ（チキンクリームシチューのようなもの）、季節限定の生のさくらんぼビールの美味しさは忘れられない思い出になりました。

今回の学会では、学会中のランチやコーヒープレイク、また初日夜のレセプションや2日目夜の古城でのバンケットなど、海外からの参加者をもてなす演出や気遣いは多いに学ぶところが多かったです。

3年後の開催地はまだ未定ということですが、また頑張って参加してみようかなと思いました。

論文紹介

『東京大学教育学部附属中等教育学校の双生児データベース』 大木秀一（石川県立看護大学），浅香昭雄（城東病院）

「世界のツインレジストリー特集号」

(Twin Research and Human Genetics Volume 9 Number 6 pp. 827–831, 2006)

“Twin Database of the Secondary School Attached to the Faculty of Education of the University of Tokyo”
Syuichi Ooki and Akio Asaka

この論文では東京大学教育学部附属中等教育学校の双生児データベースを紹介しています。本校は昭和23年(1948年)に設立し、開学当初から双生児枠を設けています。これは、双生児研究法による教育の研究や、保健学、体育学の研究などに参加していただくためです。日本における双生児研究の歴史においても重要な役割を果たしています。

最近では毎年50組程度の双生児ペア（性の組み合わせは問わない）が受験し10-20組が入学します。年齢は11-12歳です。

本校の双生児データベースは大きく3種類に分かれて管理されています。第1が入学志願者データベースです。第2が在校生データベースです。そして、第3が卒業生データベースです。入学志願者データベースでは、母親の妊娠期、双生児の乳幼児期・学童期（0歳～11-12歳まで）の成長・発達・行動・既往歴などに関するデータベースを構築しています。現在、1981年以降の1140組がデータベース化されています。在校生のデータベースは、主として学校健康簿の記録をもとに中学高校在学中6年間(12-18歳)の成長・発達・既往に関するデータベースを構築しています。同時に単胎児

のデータも収集しています。このデータは6年間の縦断データになります。現在では1975年以降に入学した双生児329組、単胎児2211人がデータベース化されています。卒業生のデータベースは第1回生からが対象者となっています。年齢は18歳以上最高齢で現在72歳です。現在、792組が該当しています。これまでに、1985年、1989年、1999年の3回にわたり医学的追跡調査が実施されています。それぞれのテーマは、糖尿病、骨粗鬆症、生活習慣病（特にメタボリックシンドローム）です。

本校は50年以上の歴史のある学校ですので、その資料は膨大です。現在なお資料の整理・電子化が進行中です。断片的な情報ではありますが、以上の3種類のデータベースを連結することによって、出生時から成人期以降の連続的なデータを再構築することが出来ます。実際に出生時から追跡したのでは数十年がかりの大掛かりな仕事になってしまいますので、それを比較的短期間で実現できることは、諸般の制限はあっても大きなことだと言えます。ライフコースで双生児の成長の跡を知るということは、単に人類遺伝学の研究を超えて、双生児そのものをより深く理解すると言う点からも非常に興味深いことです。恐らく、このデータベースはそれを可能にする数少ない一つと言えるでしょう。

本校データベースの構築に当たっては、同校の関係者をはじめ多数の方の御協力をいただいています。

平成 18 年度第 3 回日本双生児研究学会幹事会報告

日時 平成 18 年 12 月 9 日 16:00-17:00

場所 慶應義塾大学

出席者：(敬称略 あいうえお順)

安藤寿康、今泉洋子、加藤則子、小野寺勉、杉浦祐子、野中浩一、志村恵

欠席者：大木秀一、浅香昭雄、早川和生、又吉國雄、横山美江

議題次第：

1. 幹事選挙結果について

11月18日の開票の結果、安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、加藤則子、野中浩一、早川和生、横山美江、志村恵、杉浦祐子の9会員が当選した。学会長枠として小野寺勉会員が推挙され承認された。また会計監事に菅原ますみ会員が留任、田中輝子会員が村石幸正会員に代わって推挙され承認された。

2. 名誉会員推薦について

大会長経験者で70歳以上である飯田真会員を名誉会員とするか功労会員にとするかが検討され、継続審議となった。

3. 学術講演会進捗報告

加藤則子会員より、平成19年1月27日(土)に開催される第21回学術会議の進行状況についての報告があった。

4. ニュースレター編集について

志村恵会員より、第40号(学会20周年記念号)の編集状況に関する報告があった。

5. 研究会講師の確認
平成 19 年度春の研究会(6 月に予定)は又吉國雄会員の予定である。
6. ホームページの管理について
小野寺勉幹事が引き続きホームページの管理責任者となることが確認された。
7. 名簿情報について
名簿情報の開示項目を、次回名簿作成の際に確認をとることが承認された。
8. その他
今泉洋子会長は任期中であることが確認された(注 のちに誤認であることがわかり、総会で)

平成 19 年度第 1 回日本双生児研究学会幹事会・総会報告

日時 平成 19 年 1 月 27 日 12:05-13:00 (幹事会)、13:00-13:30(総会)

場所 国立保健医療科学院

幹事会出席者：(敬称略 あいうえお順)

安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、小野寺勉、加藤則子、志村恵、杉浦祐子、野中浩一、早川和生、横山美江

会計監事 菅原ますみ 田中輝子

議題次第：

1. 平成 18 年度(2006 年度) の活動報告
 - 1) 第 23 回研究会、第 24 回研究会について

第 23 回研究会 2006 年 5 月 27 日 (土) 慶應義塾大学三田キャンパス
菊地白氏(OMS 菊地クリニック院長)「一卵性双生児の口腔顎顔面 (OM) 領域における類似診断

第 24 回研究会 2006 年 12 月 9 日 (土) 慶應義塾大学三田キャンパス
創立 20 周年記念シンポジウム「ふたごが語るふたご」
パネリスト：三橋俊夫、田頭直子、志村真、志村恵 (司会)
 - 2) ニュースレターについて (第 39 号、第 40 号の刊行)
第 39 号を 7 月、第 40 号を 12 月に刊行した。
 - 3) 会員状況報告
現会員数 140 名 退会者数 21 名 新規会員数 4 名
2. 平成 18 年度の会計監査報告
下記の通りの報告がなされ、承認が得られた。
3. 第 21 回学術講演会について
大会長の加藤則子会員(国立保健医療科学院)により報告があった。
4. 平成 19 年度の活動報告
 - 1) 第 22 回学術講演会(2008 年)の準備状況について
横山美江会員が予定されていたが、所属変更の都合により、早川和生会員(大阪大学)が大会

長として開催されることになった。(注 幹事会・総会当日は日程が未定であったが、その後 2008 年 1 月 27 日(日)に決定された)

2) ニュースレターについて

第 41 号、第 42 号が刊行の予定。

3) 第 25 回研究会について

2007 年 6 月 23 日、又吉國雄会員による講演が予定された。

5. 平成 19 年度の予算計画について

事務局の作成した原案にしたがい、以下のように決定された。

6. 第 23 回学術講演会(2009 年)の開催地について

横山美江会員を大会長として行われることが承認された。

7. 新会長の推薦・承認

新会長に今泉洋子が推薦され承認、再選された。

8. その他

学生会員の学術講演会参加費の割引がなされることが決定され、即日運用となった。

平成 19 年度第 2 回日本双生児研究学会幹事会報告

日時 平成 19 年 6 月 23 日 15:30~17:00

場所 慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟 311 番教室

出席者：(敬称略 あいうえお順)

安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、加藤則子、小野寺勉、野中浩一、早川和生、横山美江

欠席者：杉浦祐子、志村恵

議題次第：

1. ニュースレター第 41 号(編集について)

記念シンポジウム、国際学会報告、論文抄録紹介、国際学会(Gedda)賞などが掲載されることが報告された。

2. 20 年度学術講演会準備状況

大会長の早川和生会員(大阪大学)により準備状況についての報告があった。

3. 平成 21 年度学術講演会開催地について

横山先生・大阪市立大学にて開催することが確認された

4. 2007 年秋の第 26 回研究会について

加藤憲司氏から「見えない病気を探る」(仮題) というテーマで行われることが報告された。

5. 事務局移転の件

平成 19 年度まで慶應義塾、平成 20 年度より大阪大学・早川先生になることが確認された。

6. 学生会員の割引対象について

割引を希望するものは指導教授のサインもしくは学生証のコピーを添付のこと。割引後の会員費は¥2000 となる

7. 新たな名誉会員への推挙について
飯田先生を推挙。候補者を挙げて検討することとした。
8. その他
- 1) 国際双生児研究学会
立候補は見合わせることにした。
 - 2) 加藤憲司会員の幹事推挙について
会長から推挙され承認された。

日本双生児研究学会平成18年度会計収支報告

日本双生児研究学会 平成18年度(2006.1.1～2006.12.31)会計収支報告

収 入		支 出	
前年度繰越	¥2,027,000		
会費収入	¥421,000	講演者謝金	¥50,000
平成14年度分	¥3,000	講演者交通費	¥45,000
平成15年度分	¥3,000	事務・消耗品費	¥11,326
平成16年度分 (4名)	¥12,000	会議費	¥21,000
平成17年度分 (16名)	¥48,000	ニュースレター編集費	¥30,000
平成18年度分 (89名)	¥267,000	印刷費	¥8,088
平成19年度分 (1団体)	¥10,000	事務局人件費	¥60,000
平成20年度 (24名)	¥72,000	通信費	¥76,210
平成21年度 (1名)	¥3,000	第21回大会開催費援助費	¥100,000
平成22年度 (1名)	¥3,000	第24回研究会会場使用料	¥17,220
受け取り利子	¥76		
		支出合計	¥418,844
		次年度繰越金	¥2,028,232
合 計	¥2,448,076		¥2,448,076

以上、相違ありません。 平成 19年 1 月 22日

監 査 菅原 まゆみ 印

村石 幸正 印

日本双生児研究学会平成 19 年度(2007. 1. 1～2007. 12. 31) 会計予算案

収入		支出	
前年度繰越	¥2,029,232	研究会謝礼	¥20,000
会費収入	¥318,000	講演者交通費	¥10,000
91人(140*0.65)*¥3000	¥273,000	事務・消耗品費	¥10,000
過年度分(15*¥3000)	¥45,000	会議費	¥30,000
利子	¥50	ニュースレター編集費	¥90,000
		ニュースレター印刷費	¥25,000
		事務局人件費	¥50,000
		通信費	¥50,000
		第 20 回大会開催費援助費	¥100,000
収入合計	¥318,050	支出合計	¥385,000
		次年度繰越金	¥1,962,282
合計	¥2,347,282		¥2,347,282

日本双生児研究学会第 25 回研究会のお知らせ (予告)

日時：未定

場所：未定

講演題：見えない病気をさぐる (Investigating Invisible Illnesses)

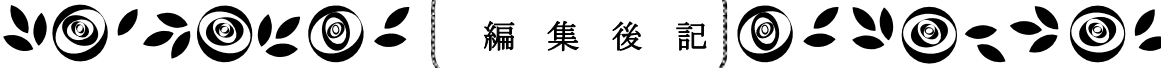
後援者：国際医療福祉大学小田原保健医療学部 加藤 憲司

医学の目覚ましい進歩にもかかわらず、原因不明の疾患は現在も数多く存在します。中でも、血液検査・X線・MRI・組織生検などのいかなる検査法を用いても異常が見当たらないような疾患の場合、その発症メカニズムの解明や治療方法の確立が困難を極めることは想像に難くありません。こうしたいわゆる medically unexplained diseases (医学的に説明されていない疾患) の代表的なものに、線維筋痛症・慢性疲労症候群・過敏性腸症候群などがあります。これらは種々の症状を呈するとともに、抑鬱・不安などの精神症状をしばしば伴うため、他の病気と誤って診断されたり、「気のせい」で済まされてしまうことが残念ながら少なくありません。従って潜在的な患者さんはかなりの数に上ると推測され、多くの患者さんたちは診断名が付かないままドクターショッピングを続けたり、家族や職場の理解を得られずに苦しんでいるのが実情です。

私は 2002 年夏からスウェーデンのカロリンスカ大学大学院へ留学し、学位を取得して今春帰国しました。同大学には世界最高水準の双生児レジストリーである Swedish Twin Registry があり、私はこのデータを用いた大規模なプロジェクトの下で medically unexplained diseases の研究に携わる幸運を得ました。本研究会においては私の博士論文の内容を中心に、同プロジェクトの他の成果も交えつつ、こうしたミステリアスな疾患の謎に挑む研究の一端をご紹介したいと思います。

ご報告とお礼

又吉國雄会員より事務局に『季刊ツインズ』のバックナンバー、ならびに双生児に関する書籍数点を寄贈いただきました。ここにご報告とともにお礼申し上げます。



編集後記

今年は国際双生児学会がベルギーで開催され、多くの双生児研究者がゲントの町に集いました。次回の国際双生児学会は、3年後に開催予定です。3年後は、日本からもさらに多くの研究者が参加することを期待したいと思います。

残暑が厳しいなか、双生児学会の会員の皆様ならびに双子・三つ子・四つ子・五つ子のご家族の皆様のご健康をお祈りしつつ、第41号ニュースレターの編集を終えたいと存じます。

ニュースレター編集委員

金沢大学 志村恵

岡山大学 横山美江